

ー文化の薫る活力ある地域づくりをめざしてー 財団では、このような事業を行っています。

普及啓発事業

- 1. 財団ニュース「作州路」29号の発行
- 2. 普及講座の開催
「パーティーゲストをつくろう！」
講 師／池田愛花里
期 日／令和8年2月28日（土）
会 場／勝央美術文学館
- 3. 事業協賛に伴うPR活動



「パーティーゲストをつくろう！」の様子

芸術文化活動事業

- 【主催事業】
■公募展の開催
○第22回ミマサカコドモ絵画展
会 期／令和8年1月6日（火）
～令和8年1月25日（日）
会 場／勝央美術文学館
展示室・町民ギャラリー1・2
- 作品展の開催
○gallery exhibition vol.37
池田愛花里作品展
パーティーは腐った食卓で
会 期／令和8年2月14日（土）
～令和8年3月15日（日）
会 場／勝央美術文学館
町民ギャラリー1



「ミマサカコドモ絵画展」会場風景



「gallery exhibition vol.37 池田愛花里作品展
パーティーは腐った食卓で」会場風景

- 【共催事業】
■公演の開催
○春風亭昇吉独演会
と き／令和7年7月6日（日）
会 場／勝央文化ホール

- 企画展の開催
《文学》
○小企画45 岡本経一没後15年
岡本綺堂『青蛙堂鬼談』＋出版社 青蛙房展
○岡本綺堂『青蛙堂鬼談』刊行100年記念展
青蛙堂鬼談×雨玉舎木版

- 《美術》
○福島金一郎没後30年記念
- 愛しの仏蘭西 -
○コレクション展 vol.48
郷土の画家シリーズ 素描と淡彩 XⅢ

- 【助成事業】
芸術文化活動助成
○勝央金時太鼓保存会活動
○勝央町文化協会活動事業

- 【後援事業】
○水嶋早樹作品展 未来の記憶
ーヒロシマ・ナガサキ・戦後80年ー
○近現代漫画家記念館共同巡回展
これが漫画！展 日本の漫画を創った時代
～楽天・隆一・良輔～
○SHOO SAXOPHONE FESTIVAL
○高見信行＆新居由佳梨
トランペットとピアノで楽しむ
クラシックと映画音楽
○福井一大津軽三味線コンサート
津軽の魂ー三味線と民謡の宴

その他の事業

- 1. 文化財資料収集保存事業
- 2. 学術的研究及び図書の発刊事業への
●助成事業を継続しておこなっております。

地域の文化活動を応援します！

地域芸術文化振興のための助成活動を実施
しております。詳しい内容は、財団事務局へ
お尋ねください。

当財団への皆様の貴重なお寄付を
お待ちしております！

当財団への皆様のご寄付は、地域文化事業の
実施に役立てられています。
ご寄付をいただいた皆様は、税額控除をうけ
ることが出来ます。

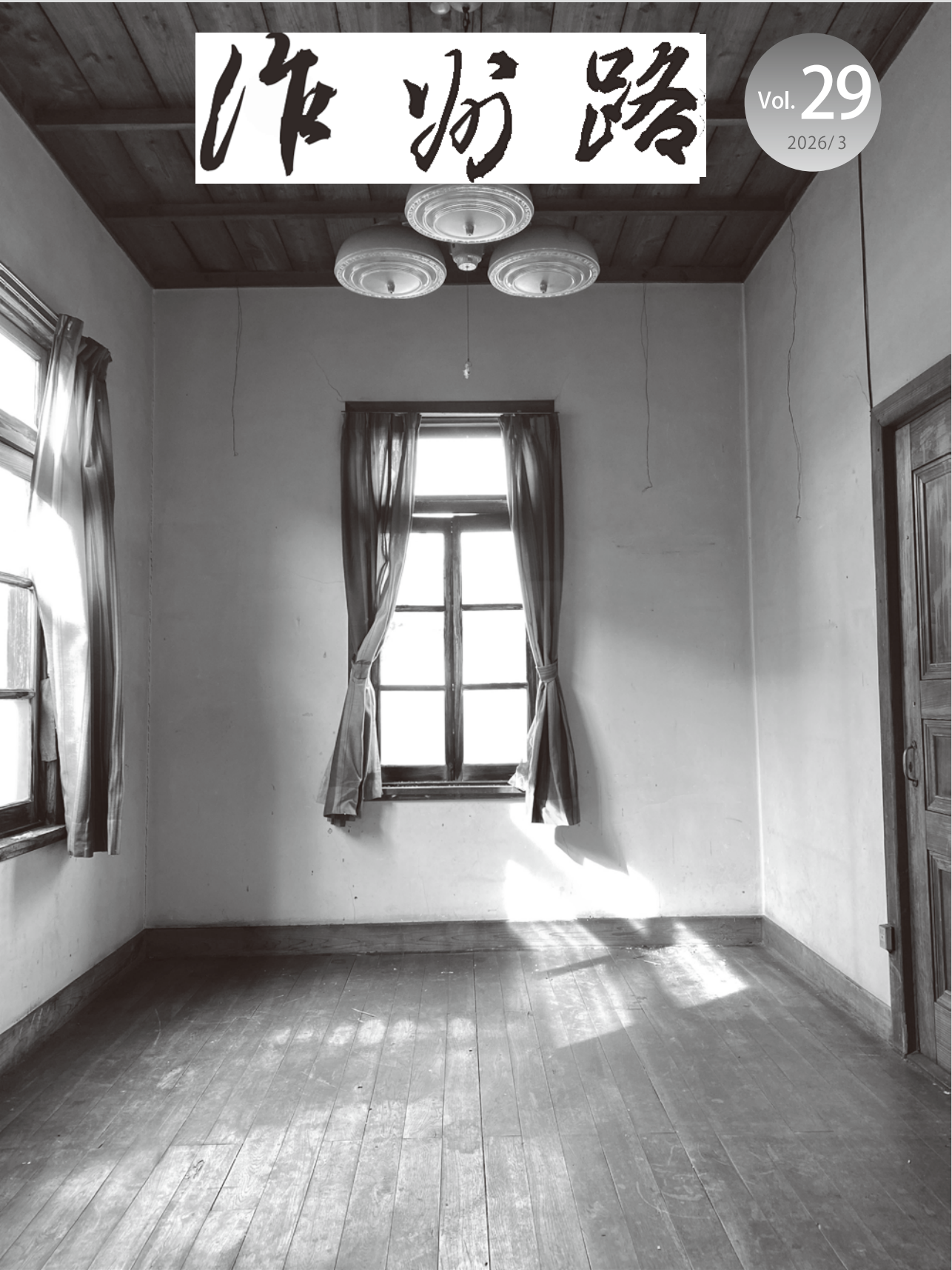
編集後記

今回の表紙は、来年（2027年12月）生誕
130年を迎える洋画家で、勝央町名誉町民の
福島金一郎が、疎開中に使用した今も現存す
る貴重なアトリエの一部を写した写真です。
戦争中、物資が乏しい中で建てられたにもか
かわらず、とてもモダンで細部にわたり瀟洒
な作りとなっており、仏国帰りの画家のセン
スとこだわりが伝わってきます。（E.N）

公益財団法人 美作学術文化振興財団



Vol. 29
2026/3



表紙について【福島金一郎のアトリエ扉前フロア】

この建物は、画家 福島金一郎が太平洋戦争の激
化で1944（昭和19）年、勝間田へ疎開した際に使っ
ていた旧勝田郡役所南側に現存するアトリエ。表
紙写真は、当時近所の子どもたちを教えていたア
トリエ扉前フロア。写真右側に見える扉を開けら
れ、東側に大きな窓が開いた天井の高いアトリエが
ある。戦中で資材が不足するなか、建築用の木材
は全て現津山市加茂の妻の実家から提供をうけた。
現在の保存状態を見ても当時としては最高級の木材
が使用されたであろう事が窺えます。



福島金一郎疎開中のアトリエ（外観）

公益財団法人 美作学術文化振興財団

〒709-4316 岡山県勝田郡勝央町勝間田207-4 Tel. 0868-38-0270 / Fax. 0868-38-0260

発行日：2026年3月31日
編集・発行：公益財団法人美作学術文化振興財団
印刷：（株）廣陽本社

出雲街道宿場考「画家とその師についての私的考察」

野村英子（勝央美術文学館 学芸員）

私は、これまで約 30 年間学芸員として勝央町所縁の画家に携わってきた。そこで、この機会に出雲街道勝間田宿界限の 3 人の画家について「弟子と師」というテーマで、私的な考察を試みることにした。

出雲街道勝間田宿は、明治、大正、昭和と中央画壇で活躍した「画家」や「文学者」などを数多く輩出した。筆者が勤務する「勝央美術文学館」は、それらの顕彰を目的に設立された施設で、中でも、福島金一郎、赤堀佐兵、水野恭子は、その前身である「勝央町郷土美術館」からのテーマ作家であった。

1. 福島金一郎とピエール・ボナール
- “福島の橙色（オレンジ）”と呼ばれる色がある。琳派の屏風絵で空間を埋める“金箔”のように、福島金一郎（1897-1994）が、晩年作品に多用した桃色を帯びたオレンジ色のことで、福島の代名詞とも言える。その色は、彼の師でフランス、ナビ派の画家※1ピエール・ボナール（1867-1947）に由来する。
- 福島金一郎は、明治30年勝間田の老舗菓子屋「板屋」の次男に生まれた。神戸仏語学校を卒業後小出檐重や鍋井克之に師事し、昭和元年二科展に入選。その後上京し、太平洋画研究所や前田寛治研究所に入所。アテネ・フランセを卒業し、父の後押しで渡仏する。

福島は、渡仏する前から或るフランスの画家に私淑していた。それが、ボナールである。

作家 天児直美氏が企画した、津山朝日新聞 1986 年元旦の記事に、小出檐重らの指導を受けていた当時、研究所の展覧会で賞をとった“人物とテーブル”（所在不明）が、既にボナール風であったことを、同郷の画家 水野恭子（独立美術協会・女流画家協会）との対談中に語っている。

渡仏後、彼はアカデミー・ランソンで、ビシュールらに画業を学んだ。しかし肝心のボナールは、当時すでに指導者を引退し、自らの創作活動に専念していた。福島とボナールの関係については、私が入庁一年目の 1993（平成 5）年（福島が亡くなる前年秋）に開催された、「町制施行 40 周年記念 福島金一郎展―画業 70 周年回顧展―」の準備で、東京世田谷のお宅を訪問した際に、画家本人から直接伺った。渡仏当時、郊外のアトリエで隠遁生活に近い暮らしをしていたボナールを、福島はかなりの熱量をもって訪問。実父のコレクションより持出した「浮世絵」を手土産に、上手く憧れの巨匠の懷に飛び込むことに成功した。

彼は、『芸術新潮』第八巻 第 7 號（昭和 32 年 7 月 1 日発行）の「ボナール訴訟騒動」で、一私が庭の一隅の入口から入って行くと、ちょうど大画家ボナールは、河に向かった庭の木立の蔭に陣取って、對岸（たいがん）を大きな紙に素描されていた。この不意の闖入者に氣づいて、如何にもけげんそうに、こちらを向かれた時の感激は忘れられない。（後略）」と記している。また、『芸術生活』10（昭和 42 年 10 月 1 日発行）「晩年のボナール」にも、一爾後何回か会って頂いて聞かされた金言は今もって有難く感銘を憶えるのである―と回想している。

凡そ 30 年にわたり、福島とその師・ボナールの作品を観てきたが、師の作風を自分のものとし血肉となって新たな作品世界を生み出している様は、まさに驚異的である。その最たるものが、冒頭の“福島の橙色”。師の色を踏襲しつつも、福島独特のオブティズム（幸福感）に溢れたアンティミスト的世界観が感じられる唯一無二の色である。東洋から渡った一人の若者が、その情熱よって、ナビ派の巨匠から、非常に濃密で純粋な教えを受け継いだことは、日本の洋画界においても非常に幸運なことであった。

2. 赤堀佐兵と小島善太郎
- 赤堀佐兵（1904-1961）は、一昨年が生誕 120 年。勝央美術文学館では、記念展が開催された。

私は、本展準備中に長らく赤堀とその師の関係性について大きな思い違いをしていたことを思い知らされた。

赤堀佐兵は、明治 37 年勝間田の呉服屋「山手屋」の四男として生まれた。1928（昭和 3）年上京し 1930 年協会洋画研究所に入所、その後独立美術協会設立と同時に入会し同会で活躍していたが、56 歳志半ばで亡くなった。

私は、記念展のため日野市立小島善太郎記念館を訪問し、同館館長の故小島敦子氏（小島善太郎の次女）に初めてお会いした。開口一番、彼女は「何故、もっと早く（記念館を）訪ねてこなかったのか!」と筆者を叱りつけた。そして、赤堀が小島の一番弟子であり、小島家と赤堀家の関係がどれほど深いものであるかを、時間の限り熱心に語り続けた。

この師弟関係の見誤りの根っこは、筆者入庁 2 年目 1994（平成 6）年「赤堀佐兵回顧展―武蔵野の牧歌人―」で、故松平修文氏（元青梅市立美術館・小島善太郎記念館 副館長）に同展図録への寄稿を依頼した際、伺った赤堀の友人や弟子から聴取したエピソードによるものであった。死病に侵され入院中の赤堀が、小島が

作家名	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000	2010	2020
ピエール・ボナール Pierre Bonnard	1867								1947								
福島金一郎 Fukushima Kinichiro					1897									1994			
小島善太郎 Kojima Zentaro				1892									1984				
赤堀佐兵 Akahori Sahei					1904					1961							
水野恭子 Mizuno Yasuko							1921									2013	

見舞いに来た際、「や、来やがった!」と言って布団に潜り込み、決して会おうとしなかったというものである。晩年赤堀の画風が非常に変化していたことも踏まえて、小島との関係も疎遠になっていたのだらうと勝手に解釈していたのである。しかし、敦子様のお叱りを受けて、これは全くの誤解であったと思い知らされた。彼女は話の中で、赤堀が小島に弟子入りを頼みに来た際、「羽織袴」の正装であったと言われた。「緑川（廣太郎）は、着流しで来た。赤堀は羽織袴で来た。」と、小島は頻りに赤堀の真面目さを周囲に褒めたたえていたそうだ。また、「独立展初日に宴席で酔いつぶれた小島を、（赤堀が）いつも（日野）駅からおぶって自宅まで送ってくれていた…。」とも。赤堀は 20 歳で実父 貫一を亡くしたが、その葬儀の際に、白い「羽織袴」着用した姿が、『目でみる美作の 100 年』<2000 年 郷土出版社発行>に掲載されている。これは筆者の憶測だが、小島への弟子入りの際に着用していたのも、おそらくこの羽織袴ではなかったか。彼は弟子入りに並々ならぬ覚悟をもって臨み、迎えた師もまた、「瘦せた丈の高い純良そうな青年」と感じ、その後生活に困窮する赤堀とその家族を個展の開催など、何くれとなく世話を焼いた。

以上のことから、赤堀は小島のことを、「第二の父」と想っていたのではあるまいか。私の誤解のきっかけとなったあの言葉は、画家として大成した姿を師に見せられると思った矢先の「病」に、その無念さから、弱った自らの姿を師に見せたくないとの言葉ではなかったか。30 年目にして、漸く気づくことが出来た師弟の深い「絆」であった。

3. 水野恭子と赤堀佐兵

水野恭子（1921-2013）と赤堀佐兵の出会いは、1938（昭和 13）年、水野が女子美術専門学校（現女子美術大学）1 回生の夏休み。赤堀が満州熱河地方への写生旅行帰路に法要で帰省し、水野の生家である勝間田「正行寺」を来訪したときことである。この年赤堀は、『立木』で、※2 鬚光の代表作《目のある風景》とともに「独立協会賞」を受賞したばかり。勝間田でも時の人で、画学生であった水野にとっては「雲の上のような」出来事と『赤堀佐兵回顧展―武蔵野の牧歌人―』『師 赤堀佐兵先生』の中で記している。

これを機に、水野は赤堀から指導を受けるようになり 1952（昭和 27）年に上京。当初なかなか芽が出ず、赤堀から「水野さんがもう少し下手なら止めて郷里にお

かえりと云うのだが…。」と言われたそうだ。しかし、1961（昭和 36）年水野は、敬愛する師を突然に失う。それ以降、赤堀の親友で独立美術協会の中間冊夫、佐川敏子夫妻に師事。壁派と呼ばれる抽象的作風を試みるが、その画風は長くは続かず、50 歳を過ぎる頃から半具象的で主題の魂を具現化したようなどっしりとした作風となる。そして 2000 年前後には、集大成である「桜」をテーマとした大作を次々と発表する。それは、桜の“花”ではなく“幹”をクローズアップし白い竜がのたうつ様に画面の真ん中に据えられた独自の作風であった。それらの作品は、師の晩年の作品にみられる“白く詩情あふれる静謐さ”を帯びて、あたかも水野の中で昇華した赤堀の魂が、作品の中で咲き誇っているようであった。

以上、師弟の形は三者三様であるが、彼らの作品は「勝央美術文学館」で、地域の人々に守られながら、日本美術史の 1 ページとして後世に受け継がれていくのである。

※本文は、筆者の私見であり反証のご提供は大歓迎。是非ともご教示を願う。

※1 ピエール・ボナール
19 世紀から 20 世紀に活動したフランスの画家。ナビ派（19 世紀末パリで活動した芸術家の一集団）を代表する画家で、アンティミスト（親密派）とも呼ばれる。

※2 鬚光の代表作《目のある風景》
日本の洋画家 鬚光（1907- 1946）の代表作。日本のシュルレアリスムの絵画の金字塔といわれる。

【参考文献】
・『赤堀佐兵油繪頒布會趣意及規約』1938（昭和 13）年
・『芸術新潮』第八巻 第七號 1957（昭和 32）年
・『赤堀佐兵遺作展バムフレット』1962（昭和 37）年
・『芸術生活』10 1967（昭和 42 年 10 月 1 日発行）
・津山朝日新聞 1989（昭和 64）年 1 月 1 日掲載「師ボナールに会うまで」
・『日常の小さな幸せ アンティミストの世界』1989（平成元年）年 埼玉県立近代美術館
・『赤堀佐兵回顧展―武蔵野の牧歌人―』1994（平成 6）年 勝央町郷土美術館
・『第 80 回 二科回顧展』1995（平成 7）年 産経新聞大阪本社
・『水野恭子展』2006（平成 18）年 勝央美術文学館
・『オルセー美術館特別企画ピエール・ボナール展』2018（平成 30）年 日本経済新聞
・『目でみる美作の 100 年』2000 年 株式会社郷土出版
・『赤堀佐兵と独立美術協会の画家たち』2024（令和 6）年 勝央美術文学館
・『日本が見たドニ | ドニの見た日本』2024―2025（令和 6-7）年 久留米市美術館